皆で話し合う　『マルコによる福音書　(7)」　２００６・７

マルコによる福音書２章１３節～２８節

レビを弟子にする　（マタイ９：９～１３　ルカ５：２７～３２）

１３イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集まってきたので、イエスは教えられた。１４そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。１５イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪びともイエスや弟子達と同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従っていたのである。１６ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪びとや徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、どうして彼は徴税人や罪びとと食事をするのか」と言った。１７イエスはこれを聞いて言われた。医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪びとを招くためである」。

マタイによる福音書９章には、マタイと言う徴税人がイエスに従った記事が載っています。レビという名がマタイに変わっただけ、とも思われる記事です。そこで、マタイとレビとは同一人だという説と違う人だという説（①２弟子のひとりマタイは第一福音書の著者とされていますので、レビをマタイとしたのでしょう）とがあります。どちらも尤もらしい。でもそれはどちらでも良いのです。大切な事は、彼らが（そしてエリコで救われるザアカイも）、取税人であったということです。罪びとと共に取税人は、人々から、特にファリサイ人と律法学者から、人間扱いをされていなかったのです。取税人とその下請けたちは、請け負った税額をローマ総督や、ヘロデ王家に収めればよいのですから実際の徴税は、民衆の無知に付け込んで、出来るだけ多く徴収して私服を肥やしていたのです。だからユダヤ社会では取税人は、盗賊や詐欺師と同列に置かれ不誠実な不道徳職業とされ村八分のような取り扱いを受けていたのです。それらは「地の民」（アム・ハ・レツ）として、汚れた民、救いには縁のない民として見捨てられていた（ヨハネ・７：４９）。遊女や他の犯罪人たちと同列にされている、その取税人がイエスの弟子に召されたと言う事実が大切なのです。世間から人間扱いされていなかったレビは、イエスの話を聞いた所で所詮俺には何になる？」と動かなかったのでしょう。ザアカイと違う所ですね）。そこへ、イエスの声がかかったのです。思いがけない人間扱いがあったのです。そしてイエスはレビの所で大勢の取税人や罪びとたちと共に食事をしている」と非難するのです。それを見た律法学者たちは、何たることか！彼はあんな奴らと共に食事をしている」と非難するのです。そこでイエスは言われる。健康な者に医者は要らない。いるのは病人である。わたしが来たのは、義人を招くためでなく、罪びとを招くためである」。ここで気をつけなくてはいけないのは、イエスは、罪びとを招いて病気を直す為だとは言っておられないということです。ホセヤ書６章６節の言葉、**わたしが喜ぶのは愛であって、いけにえではなく、神を知ることであって、焼けつくす献げ物ではない**」をひいて示唆していることですが、当時のユダヤ教の原理は、神と人との関係は、人間が神に捧げるよきものによって成立するという原理でありました。そして、神から与えられる律法を守る行為こそ神に捧げるよきものであるから、律法を守ることこそ、なすべき務めである。それに対してイエスは、イエスが生きておられる世界は「憐れみの原理」に立つ世界であって、人間がどれだけよきものを神に捧げる事が出来るか、ではなくて何も捧げる事が出来ない人間（いわば、貧しい民）にも神が、ご自分の憐れみをもって無条件に交わりの手を差し伸べて下さるのです。イスラエルの神は本来、預言者も指摘しているように、あわれみ、いつくしみの神」でありました。それが、傲慢という人間の本姓的な罪の為に、人間を主人とする「けにえの原理」の宗教に転落してしまっていたのです。**イエスは来られた**。そしてこの転落を元の状態、神様の憐れみのみ、という状態に戻そうとされるのです。だからイエスは、レビやマタイ、罪びとたち（貧しい人）を招かれる。彼らを召す為に来られたのです。私た

ちは、その招かれ、召された所で、神様の義に気づかされました。同時に自分の罪が実に深いことに気づかされました。その自覚が生まれたと言ってもそれで私がどうにかなると言うものではないのです。つまり、他人と比較して自分があのような罪びとでない事を感謝している限り、ファリサイ人、律法学者と変わらないのです。私たちは主日に、聖餐に与かります。その時イエスの十字架と向き合っているのです。その時、イエスは十字架上で苦しみ、死んで行かれます。私たちもその時、自分を無価値、無資格と思いながら、イエスと一緒に死んで一体になるという祝福に与るのです。義とされる、洗礼を受ける、召される、自分の十字架を担って、イエスについて行く」、と言うのはそのような死を乗り越え、聖霊を頂いてイエスのいのちを生きることです。自分自身が貧しい者である事を気づかされる」と言うことが悔い改め、メタノイア、そして新しいいのちの基本なのですね。

断食についての問答（マタイ９：１４～１７　ルカ５：３３～３９）

１８ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は、断食していた。そこで、人々はイエスのところに来て言った。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」１９イエスは言われた。「花婿が一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿が一緒にいるかぎり、断食はできない。２０しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる。

２１だれも、織りたての布から布切れを取って、古い服に継ぎを当てたりしない。そんなことをすれば、新しい布切れが古い服を引き裂き、破れはいっそうひどくなる。２２また、だれも、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。そんなことをすれば、ぶどう酒は革袋を破り、ぶどう酒も革袋もだめになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。」

いったい断食は何の為に行なうのでしょうか。現在のように美容の為とか、せいぜい長生きの為とか言うことではありませんでした。懺悔、痛恨の表現として断食はどの宗教でも行なわれていたのですが、ユダヤでも一年に一度行なわれていました（大贖罪日の断食・・レビ記１６：２９～３４）が、断食が国民的懺悔の日として制定されるのは、捕囚後のことです（ゼカリヤ８：１９）。それが週２回となり（モーセが律法を受ける為にシナイ山に登った、週の第５日と下山したと言われる週の第２日）、ルカ１８章でファリサイ派の人が神殿で、隣の徴税人と自分を比較し（自分は週に２回断食をし・・）と威張って祈っている。そのようにファリサイ派の人はおのれを誇るやや偽善的な断食をしているが、バプテスマのヨハネの一派の人々は終末に備えて悔い改めの為、もっともっと真剣に断食律法を守っていた。そのような背景の中で、イエスの弟子達だけが断食しなかったのは極めて特異であり、断食しないことは、断食律法を神聖なものと人々が考えている、その律法への裏切りを思わせたのです。だから、律法学者から、「ヨハネの弟子達とパリサイ人の弟子達は断食しているのに、あなたの弟子は断食しないのは何故か」と言う詰問がイエスに寄せられるのです。お前達は異端じゃあないか、と。

それに対してイエスは（律法では、婚礼の客は、花婿が一緒に居る所で、断食する事は出来ないような規定になっているではないか」と答えられる。ユダヤの婚礼は１週間も続き、その間客は週２回の断食を守る律法の義務から解放されていたのです。イエスは（今や預言者が予言した、来るべき者メシアが来たのだ。終わりの時が来たのだ。これは神が人と共にいてくださる喜びの日である。地上の婚礼でも人は断食の律法から解放される。まして永遠の花婿であるわたし、イエスと一緒に生きる所で、どうして断食をする事が出来ようか」と答えられたのです。次いでイエスは（花婿が一緒にいる限り彼らは断食できない。しかし花婿が取り去られる時が来る。その日には彼らも断食する」と言われたのですが、それはどういうことか。花婿が取り去られる時というのは確かにイエスの十字架の死を意味し、その時以後はどうなるのかという問題については、古い着物と新しい布。新しい葡萄酒と古い革袋のたとえ、の後でじっくりと考えましょう。

新しい布は縮む力が強いので古い着物の破れた所に縫い付けると、その縫い目で破れることになる。

新しい葡萄酒はまだ発酵を続けているのでその膨張力で、弾力を失った革袋を破裂させる事になる、と生活の中から生まれた智恵を述べられたのですが、これは何を表しているか。この２つの譬えは、イエスご自身の中に来ている御霊で生きるという事態が、もはやイスラエルの律法という古い枠に収め切れないものである事を示されたのです。イエスが与えてくださる新しい生命に生きる者たちは、その新しい生命にふさわしい新しい形の中で生きるであろう。それは使徒パウロが　私たちは律法から解放されているので、もはや文字と言う古い次元ではなく、御霊の新しい次元で仕えているのである」（ロマ書７：６）と言って、命がけで主張した事と一緒です。イエスの弟子達が断食をしないのは、その事の証しの一つです。確かに、キリストが共に居られる限り、私たちはイエスと共に食する事を重んじなければなりません。聖餐式の時、「あなた方はこのパンを食べ、この杯を飲むごとに主が来られる時まで主の死を告げ知らせる」（１コリント１１：２６）のです。けれども、主は死なれたのですが直ぐに復活して、現在、私たちと共におられる事も、私たちが経験している事実です。主イエス・キリストの十字架の死によって救われたと信じる私たちは、型に当てはまらない、新しい、自由な生き方を頂いているのです。イエスのような、枠にはまらない、自由な、おおらかな生き方の方が、謹厳で、厳粛で、穏健で、しかし息のつまりそうな生き方よりも本当のものだと思えませんか。がしかし、人生は一筋縄ではいきません。断食しさえしなければ、型にはまりさえしなければ、それで正しい、とどうして言えましょう。目先の新しさだけでは、必ずしも真実の新しさ、すなわち、

主に望みをおく人は新たなる力を得　鷲のように翼を張って上がる。
走っても弱ることなく、歩いても疲れない。（イザヤ書４０章３１節）

と言う状態にはなれないのです。このような姿勢を得るのは、イエス・キリストの愛を聖霊によって私たちの内に頂かなければならないでしょう。

さて、十字架にイエスがつけられて昇天された後、キリスト教団では、断食が行なわれていたのでしょうか。教団の一部では確かに行なわれていた（使徒言行録１３：２～３，１４：２３）。また、マタイによる福音書山上の説教の所（マタイ６：１６～１８）で、イエスの断食の教えがありますから、弟子達の断食も行なわれていたであろうと言う推測も十分に成り立つ。それでは、私たち現在の信徒はどうでしょう。私たちは確かに目に見えるイエスと一緒にいるのではないが、霊においては復活の主キリストと一緒にいる。だから今でも花婿なるイエス様と一緒にいるのです。神と人との永遠のいのちの交わり」が成就しているのです。この喜びの場でどうして断食が出来ましょうか。花婿を取り去られる」と言うのは、イエスの十字架の死を指しています。そしてイエスの十字架はまた私の死です。だから私たちは断食する。私はキリストと共に十字架につけられて死んだ。この十字架における自分の死の告白がその断食なのです。キリストを信じ、その十字架に合わせられて死ぬ者こそ、真に自己を否定する者、まことに断食をする者です。断食とは本来自己否定の表現なんです。

このように、イエスの弟子という者は、既に花婿と一緒にいる喜びの故に、律法の行為としての断食をする事はないが、その内面では、十字架による徹底的な自己否定（真実の断食）を秘めている。復活の主イエスと共に生きる喜びは、十字架に合わせられて自己が死んでいる場においてのみ実現する。その場合にでも、祈りに集中する為に断食をする事があることは言っておかねばならない）。

安息日に麦の穂を摘む　（マタイ１２：１～８　るか６：１～５）

２３ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子達は歩きながら麦の穂を摘み始めた。
２４ファリサイ派の人々がイエスに、御覧なさい。なぜ彼らは安息日にしてはならぬことをするのか」と言った。２５イエスは言われた。「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がなくて空腹だったときに何をしたか、一度も読んだことがないのか。２６アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかには誰も食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか」。２７そして更に言われた。「安息日は人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。

28だから、人の子は安息日の主でもある。」

マルコは、第1章でイエスがガリラヤに現れて「神の国」の福音を宣べ伝える活動を始められたことを語った後、直ぐ第2章で、その福音が当時のユダヤ教（律法）と衝突して惹き起こした激しい論争をまとめて記録しています。その論争の最後に安息日についての論争が来ます。

安息日を覚えて、これを聖とせよ」という規定は、ユダヤ教の中で最も根本的な律法である「モーセの十戒」の中の一つで、「六日の間働いて何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない」（エジプト記２０：８～１０）というものです。この律法は「殺してはならない」と言う律法と同じ重さの律法で、これを犯す者は死をもって罰せられると律法に明記されています（エジプト記３１：１２～１７）。イスラエルの民は安息日規定の遵守をいかに真剣に受け取っていたか、マカベヤ戦争の時、安息日に異教の軍隊の攻撃を受けた時、安息日を守るために武器を取って戦う事を拒み全滅した事があった程でした。それは、安息日を守る者がヤハウエの民であり、守らぬ者は、ヤハウエとの契約を破る者とされていたからです。それから、捕囚後律法（モーセ５書）が成立して、安息日律法が最終的に確立した後も、社会や生活の具体的な状況においてどのようにすれば「いかなる仕事もしてはならない」と言う安息日の律法を守る事になるのか、学者によって討論され研究されて、多くの細かい規定が生み出されていたのです。たとえば、安息日には２０００キュビト（約９００メートル）以上の距離は歩いてはならぬ。また、他人の畑であっても、麦の穂を手で摘んで食べる事は許されていた（申命記２３：２５）。ところが、律法学者の口伝伝承（ハラカ）では、手で穂を摘む事は収穫作業であるとして「してはならぬ事」になっていた。イエスも弟子達もその事は知っていたでしょうから、あえて彼らの前で禁止規定を無視されたのは当時のユダヤ教における律法の支配に対する挑戦と受け取られる。イエスは彼らの追及に対してダビデの、神殿における行為を、『人は生存を脅かされる緊急事態においては律法に違反する行為も許される』と言う事を論証する為に引用されたのではない。そうであれば、ファリサイ派の学者達の律法の支配の枠の中の問題となります。そうではなく、もっと根本的な問題、律法の存在理由そのものを論じるためにダビデ問題を取り上げられました。一体人間にとって律法とは何でしょう？　イエスは一言で述べられます。「安息日は人の為にあるもので、人が安息日の為にあるのではない」と。この言葉はまことに革命的です。イエスは当時のユダヤ教が求めているような律法遵守はもはや必要ではない、と言っておられるのです。イエスの中では既に安息日が成就している。律法を行なうのとは全く別に、賜った聖霊により神との交わりが実現し、イエスの中では創造、贖い、完成の祝いが既に明らかになっている。聖霊によりイエスの中に来ている『神の支配』の現実は、律法の細則遵守を要求するユダヤ教に対する挑戦とならないではおれないのです。

『このように、人の子は安息日にもまた主なのである』。

人間が安息日の為に創られたのではない。人間の為に安息日の制度が定められたのです。終わりの日に人間が本来の姿に回復される時、人間はもはや安息日律法に縛られた奴隷ではなく、安息日の定めを自分の中に成就しているものとなり、その主人となる。イエスはこのように終わりの日に出現する新しい人間を先取りし代表する者として、ご自分を『人の子』と呼ばれる。『人の子』イエスは聖霊による神との交わりの中で既に『安息日の主』になっておられる。しかしこれはイエスだけのことではない。やがてイエス・キリストにあって贖われ、同じ聖霊の現実に生きるようになる新しい人間すべてに成就する事です。今や人間はキリストにあって、創造と贖いと完成の喜びの祝祭である安息日を毎日祝っている。それをどのように表現するかは人間の自由です。人間は安息日の主です。

（市川喜一師著『マルコ福音書講解Ⅰ』より）。この所を読んでいて、エリザベス・キューブラー・ロス女史が言っている、生き切る歓喜と自由に通じるもの」を感じました。この中から福音の喜びを感じ取って頂けたら、と願っています。安息日問答は非常に大切と感じていますので、次回も続いて、イエス・キリストの福音と自由を示す、安息日の話を読みましょう。